

# 馬場辰猪『日記』から見た 『日本文典初歩』第2版の考察

— 成立および特色を中心に —

金 沢 朱 美

## 1. はじめに

馬場辰猪（1850—1888、以下、馬場）は1873年、ロンドンに留学生として滞在中に“An Elementary Grammar of the Japanese Language”（以下、『日本文典初歩』）を刊行した。1873年版は、森有礼が執筆した“Education in Japan”（『日本の教育』）（1872）中の国語としての英語採用論に反駁して、当時、俗語として軽んじられていた「口語日本語のどの部分にもなんらかの規則が見出されること」、英語を国語にしなくても「文法自体に関するかぎり、日本語は普通教育の基礎を教えるのに十分完全な言語である」ということを立証するために執筆した。馬場は、口語日本語の体系的な規則を記述し、さらに習得のための容易な練習問題を示した。2版（1888）は初版において100問の練習問題が120問に増補されていて、馬場が米国に亡命中病没する年の6月にロンドンおよびニューヨークから出版された。3版（1904）は在ロンドン日本大使館の一等書記官浮田郷次が表記、誤植、僅少の単語等の改訂を行い、ロンドンで出版したものである。

本稿では、馬場辰猪が残した英文の日記を考察することにより、増補された2版の練習問題を中心に2版の成立時期を探り、同時に馬場自身の武家の出自や自由民権思想家としての思想や趣味生活が2版の増補練習問題に与えた特色を考察する。さらに浮田による3版の表記、単語の改訂にも言及する。なお、本稿で使用した『日本文典初歩』2版は Reese Library of the University of California 所蔵版、表紙には“An Elementary Grammar of the Japanese Language”、中表紙には“An Elementary Grammar of the Japanese Language with Easy Progressive Exercises”とある。3版は京都大学所蔵版で、表紙には“Grammar of the Japanese Language”、中表紙には初版原文どおり、“An Elementary Grammar of the Japanese Language”、次の頁には“An Elementary Grammar of the Japanese Language with Easy Progressive Exercises”とある。原寸は縦18.5 cmの本であったことが示されている。

## 2. 方法

本稿では馬場の日記を考察するにあたり、馬場孤蝶（以下、孤蝶）「馬場辰猪日記〔抄〕一日記を通して見たる馬場辰猪を中心に―」<sup>1</sup>（以下「抄」）および同「日記を通して見たる馬場辰猪」<sup>2</sup>（以下、『雄弁』）を参考文献として適宜参照した。日記は『馬場辰猪全集』第3巻に所収される英文日記<sup>3</sup>（以下、英文日記）をテキストとして用いたが、「抄」には英文日記には掲載されていない、散逸する前の日記（1880年—明治13年、1882—1884年—明治15—17年）や、『雄弁』に載せられていない日記部分（1880年—明治13年の日記）が掲載されている。一方、「抄」では「自伝本文327頁下段13行目以下10行参照」等のように、自伝にある部分を省略してしまっているが、『雄弁』には掲載されている。さらに英文日記には「抄」に掲載されていない日付の日記が掲載されている。

結局、これら3点の記事を丹念に読み解くことにより、『日本文典初歩』に関する事情がある程度浮かび上がってくると考えられる。上記3点の文献をつき合わせても孤蝶が言及しなかった日付の日記で、後に散逸してしまった部分に書かれていたかもしれない『日本文典初歩』関係の事情は解き明かすことができない。

英文日記には1875年および1877年の日記、1880年7月分、8月分、12月の一部分、1886—1888年の日記が収録されている。一方、「抄」によると、1875年1月1日の記述から始まり、1875年、1876年、1877年、1878年、1880年については「抄」であるが、日記の訳出がある。1882年—1884年、1885年については孤蝶の解説による記述がある。1886年、1887年、1888年については日記の相当詳しい訳出があるが全文ではない。

馬場の日記の中心を成すのは日々の来客や訪問先、支出の内訳とその日の活動、用事等でほとんど英文で認められている。観劇のばあいは劇の名前や俳優名も書き残し、金銭の出納に関しては詳述している。日記という極めて個人的な覚書であるから、前後のつながりや解釈に苦しむところも多いが、『日本文典初歩』を巡る初版出版後の動向や2版への準備と実現、馬場の中での『日本文典初歩』の位置づけの変化について考察したい。

## 3. 2版（1888）を巡る考察—『日記』を視座として—

### 3-1. 2版成立を巡っての考察

馬場は上述したように1873年に初版をロンドン留学中に刊行するが、初版がイギリスで反響を呼び一定数の学習者が生まれたことは、以下に挙げる馬場の日記の1875年7月8日、12月20日、孤蝶による1876年の記述（下記、在英時代）から知ることができる。さらに日本協会の会長であるArthur Diosyが初版で学習し、偶然の馬場との邂逅に如何に感激したかを綴っている3版の序文からもわかる。このような初版の好評のため、「抄」における1876年の箇所には下記のように孤蝶の記述により、「英文の日本文典中の文例を書いたことが諸所に散見する」とあり、1877年2月20日（火）以下の

日記にも、馬場は2版の練習問題のいくつかを執筆していたとある。そこから馬場は在英時代に既に2版の刊行を目論んでいたことがわかる。日記におけるイギリス留学中からアメリカ亡命時代における『日本文典初歩』を巡る記事（拙訳）を挙げると以下の通りである。

### 在英時代

1875年7月8日（木）『日本文典初歩』2部を在英公使官に送った。

1875年12月20日（月）トゥリュブナー商会から『日本文典初歩』50部を送るという書簡を受け取った。

1876年については英文日記は残存していないが、「抄」には孤蝶により、複数の日付の日記が採り上げられている。具体的な日付で、『日本文典初歩』に言及した部分は採り上げられていないが、孤蝶による記述には「此年の日記の中には、日本の俚言の翻訳を企てたこと、英文の日本文典中の文例を書いたことが諸所に散見するのみで、著作の方では特に云ふべきことは無いやうである。」<sup>4</sup>とあり、辰猪が1876年に既に『日本文典初歩』の改訂版を考えていたことがわかる。「諸所に散見する」にもかかわらず、当該日付の日記が残存していないのはまことに惜しいが、孤蝶は『日本文典初歩』成立を巡る辰猪の活動には細部に亘る関心を示していなかったようである。

1877年2月20日（火）『日本文典初歩』2版のための練習問題をいくつか書いている。

1877年2月21日（水）引き続き『日本文典初歩』2版の練習問題を書いている。

1877年3月4日（日）遂に動詞の活用形「uti ute uta」について私の考えが定まる。

1877年3月11日（日）『日本文典初歩』2版の練習問題 CXVIII を書いている。

1877年3月13日（火）『日本文典初歩』2版の練習問題 CXX を書き終わる。

1877年3月14日（水）トゥリュブナー商会へ行く。

1877年9月14日（金）トゥリュブナー商会に書簡を出した。

1877年3月4日の日記では、馬場が動詞の活用形について自身で長らく熟考していたことがわかる。馬場が学んだ藩校では、母語である日本語について人々は動詞の活用形を学ぶ等という教育は受けていない。1877年より10年後の1887年に東京の帝国大学に入学した岡倉由三郎は、師チェンバレンの授業について次のように回想している。

…僕が先づ講義を拝聴したのは、「日本文典」の科目で、同一の科目が同じ週に物集高見教授からせられた。同教授の「てにをは教科書」や「かなづかひ教科書」が当時の講述の資料であり内容であつたに対し、チャムブレン先生の御講義は、日本語の言語学上の位置を明かにせられ、(前略)動詞の活用の語幹(stem)の無変化(sak-a,sak-i,sak-u,sak-eの類)の事、等々、当時は極めて耳新しかったいろいろの問題を、諄々と示して下さつたので、自分等の自国語の構造についての、新しい考察の眼は、茲に大に視開かれたのであつた。<sup>5</sup>

とあり、明治20年代にはチェンバレンによる「日本文典」は清新の感が深く、この方面の学問の極めて若かった時代には、(チェンバレン)先生の語々々々が我々に驚異の眼を見ひらかせたのであつたとある。<sup>6</sup>

ここから言語学の概念を持ち込んだ日本文典の講義は日本ではお雇い外国人を抱えた帝国大学において初めて受けることができる授業であつたことがわかる。

馬場は、金沢(2008)<sup>7</sup>にあるように、福沢塾で『英吉利文典』を使い、初めて英語を習うのであるが、『英吉利文典』はチェンバレンの講義のように言語学的見地から英語を教える教科書ではない。馬場の場合は、渡英した後に英語やフランス語の学習をしたり、渡米してドイツ語の勉強をしたりするなかで、西洋語の屈折や活用語の概念を用いて、口語日本語を分析考察できる視点が養われたのではないか。

「抄」によると孤蝶による次の記述が見られる<sup>8</sup>。「明治9年(1876年)の日記によると、辰猪はリヤルスといふ人を師として法律学を学び、セレクスといふ人からフランス語を習っていたとある。

残存する英文日記における記録では、1875年10月25日、27日、11月1日、3日、8日、10日、15日、17日、22日、24日、12月8日、13日、20日の、3か月で13回、フランス語の授業をKing Henry's Roadで受けたとある<sup>9</sup>。日記がないため断定できないが、初回の渡英においてもフランス語の学習をしていたと推測される。

ドイツ語の学習については、英文日記には在米時代の1887年1月28日付に、アーン著ドイツ語文法書を買ったとある。「抄」には孤蝶により、アヒュ著独逸語文法書<sup>10</sup>と書いてあるが、英文日記ではAhn<sup>11</sup>となっている。

AhnというのはFranz Ahn(1796-1865)のことで、Howatt(1984)<sup>12</sup>によると、その教授法は概略、以下のようである。

1827年にドイツ人学習者のためにフランス語の教科書を作ったのが、アーンの教科書の初めであった。1829年にオランダ語の、1834年にフランス語の教科書を作った。アーンメソッドは実践的で容易である。発音に関して短い紹介の後、基本的な教材が始まる。各セクションには番号が付されていて、奇数の番号のセクションには文法要約が書かれている。理論的枠組みのところには1ダースの新語彙提出がある。その下には学習者の母語に訳されたいくつかの文章がある。一方、偶数の番号のセクションには外国語に訳された練習問題がある。わずか66ページに68題があり、12の語彙の練習セクションがあり、12ページの易しい対話例がある。(拙訳)

金沢(2008)にオレンドルフの教科書と『日本文典初歩』の相似点の考察が見られるが、上記のアーン教授法を見ると、奇数、偶数の番号の各々のセクション毎に、文型の元といえるような翻訳の短い練習問題を配置しているところが、馬場『日本文典初歩』はオレンドルフばかりでなく、疑いもなくアーン教授法に影響を受けたと考えられる。

長沼直兄（1981：131）によると、

従来より非常によい方法が考えられ、アーン Ahn やオレンドルフ Ollen-dorff 等の本ができた。（中略）そういうのは今の直接法と、昔の翻訳法の間で、たくさんの方の文法上の練習を与えた。（中略）発達の歴史から言うと従来の翻訳法ばかりでいったものが、アーンやオレンドルフにより多少日常の言葉を反復し練習させることにより熟達させるようになってきた<sup>13</sup>。

とあり、どちらもアーン教授法が古い翻訳法を脱して直接法出現前夜の教授法であったことを示している。

馬場は自らも西洋語を学習し、同時にこのような西洋語の学習書を教科書執筆者の眼で考察していたことが考えられる。

日本において、馬場は動詞の活用を国文法として習ったわけではない。いわば自学自習であるゆえに、上記の *uti ute uta* についても長い時間をかけて自身で考察し、結論を出したということであろう。

1878年1月7日には馬場は、政治に関する信条的なことで他の日本人留学生と激論になり相手を傷つけ、拘留される。1878年3月14日にはイギリスを去り帰国の途に着かざるを得なくなったためか英時代には2版の刊行は実現しなかった。実際に出版されたのは1888年になってからである。

1880年の日記の November に以下の記事が記されている。原文も日本語文である。

（前略）余英国ニ至テヨリ此方ニ為シタル事業ハ甚タ少シト雖ドモ国家ノ為ニ為シタルコトナルヲ以テ此ニ記録スルナリ。西洋千八百七十二年ノ頃 全権公使森アリノリ米国ニ在テ、我本邦ノ言語ハ、我ガ国人ノ教育ヲ助クルニ足ラサルヲ論ズ。余此説ヲ非ナリトシテ日本文典ヲ英語ヲ以テアラワシ、イサ、カ本邦言語ノ法則ヲ論シ本邦ノ教育ヲ為スノ機關タルヲ得ルヲ示ス。<sup>14</sup>

1880年の日記のこの条を読むと、馬場のなかで『日本文典初歩』初版成立の事情が8年経った1880年においても重要な動機であったとして記されている。次に在米時代を考察する。

## 在米時代

1886年12月1日（水）アブルトン商会から書簡を受け取る。

1886年12月7日（火）Falkman 氏に私が著した『日本文典初歩』（初版—筆者注）を貸してくれるよう書簡を出す。

1886年12月21日（火）Falkman 氏から私が著した『日本文典初歩』を受け取った。

1886年12月30日（木）『日本文典初歩』（2版—筆者注）の草稿を書き終わり、ロンドン

のトゥリュブナー商会に送付した。

1886年12月31日(金)年末の仕事は『日本文典初歩』を補修してロンドンのトゥリュブナー商会に送付したことである。

1887年1月28日(金)アプルトン商会を訪問しなければならない。

1887年1月29日(土)アプルトン商会が『日本文典初歩』(2版一筆者注)を受け取る。

1887年4月9日(土)『日本文典初歩』(2版一筆者注)の草稿についてトゥリュブナー商会に書簡を出す。

1887年10月25日(火)トゥリュブナー商会に『日本文典初歩』2回目の校正刷りを刊行するよう書簡を出す。

1888年2月2日(木)トゥリュブナー商会から草稿を受け取る。

1888年2月7日(火)トゥリュブナー商会と印刷業者に書簡を出す。印刷業者へは書留で出す。

1888年5月16日(水)アプルトン商会へ22ドル75セントの為替手形を送る。

1888年6月12日(火)新聞紙上に『日本文典初歩』紹介記事を同封したWilliams氏の書簡を受け取る。

1888年6月13日(水)アプルトン商会へ『日本文典初歩』15部を送付するように書簡を出す。

1888年6月17日(日)『日本文典初歩』をBoardman氏とJ.R.Young氏に送る。

在米時代の日記の記事を読むと1886年の12月21日から30日の間の10日間で2版として出版すべき『日本文典初歩』の練習問題を増補したように思われる。『日本文典初歩』初版は1873年の秋にトゥリュブナー社から出版されたが、1873年12月には日本政府が官費留学生一斉召還を決定しており、馬場も1874年10月には帰国の途に着いている。1875年6月には再留学のため、再びロンドンに戻っている。1875年7月からは早速、初版をあちらこちらに送っている様子が窺え、馬場の『日本文典初歩』は好評を博したと考えられる。前述の、3版の序文を書いたArthur Diosyに邂逅したのも1876年である。馬場は1876年に増補をして2版を出版することを考えたのであろうと思われるが、増補の部分を執筆するのに、上述したように1876年のある時期から1877年3月13日まで時間を費やしている。そのときの草稿はイギリスからの帰国や日本での政治活動、逮捕、アメリカへの亡命等で散逸してしまったのだろうか。あるいは在英時代に執筆された練習問題の草稿を11年後の在米における刊行にいささかでも利用したのであろうか。現在わかる明確なことは在英時代の1876年から2版の執筆を常に念頭に置いていたこと、実際の成立は在米時代最晩年の1888年6月であったことである。

### 3-2. 2版練習問題の考察

#### 3-2-1. 2版練習問題の内容の検討

2版の増補練習問題の考察の前に金沢(2009)<sup>15</sup>により初版に提出されている語彙に

ついて述べたい。

初版に提出されている語彙は、文法の説明項目ならびに練習問題はともにごく日常的な語彙から成り立っている。ほぼ当時の日常生活に密着した生活語彙であることがわかる。語彙数は約 430 語で、現在における外国人学習者の日本語能力のレベルを基準として比較すると日本語能力試験 4 級の習得レベルが語彙 800 語、海外技術者研修協会編『にほんごのきそ I』(1972) に収められた語彙が約 785 語であるから『日本文典初歩』ではおよそその半分強の語彙を紹介している。抑えられた語彙数で当時流行していた問答形式を使い、ごく基本的な日本文の形の口頭練習をめざす方法はオレンドルフの学習書に相似している。

以上が初版練習問題の語彙や例文の内容の概略であるが、2 版における練習問題の増補部分 CI から CXX までに出現する語彙や例文は、初版の練習問題とは相当に異なった特色が見られる。母国（英米）において入門から始める日本語学習者にとっては日本文化の理解が困難であると思われる語彙や例文が数多く提出されている。初版（1873）においては、初級の学習者が初めて日本語を学ぶのに異文化理解が困難であると思われるような語彙や例文はなく、概ねどこの国においても使用できるような例文を配置していた。増補練習問題の例文は初版の 100 題と同じ問答形式の反復練習の形を踏襲しているが、例文内容の特色は著しく異なる。

1 点目の特色として、昔の武人や古戦場が語例として多く出ている。馬場が武家出身であることがよく窺える内容である。

以下、2 版増補部分の語彙と例文を中心に初版との違いを考察していきたい。なお、大文字の使用法やローマ字表記は今日のと異なり、馬場自身の誤記も見られるが、以下の表記はすべて馬場に從った。

## CXIX

動詞の語彙ならびに活用表は省略する。（筆者による。）

Hei, army.	Yubin kiyoku, post-office.
Noti, future, or after	Yubin, mail, or post.
Na, name.	Tuini, finally.
Yo, generation.	Minato, harbour.
Ko, Lord, or a term of respect.	Mukasi, ancient times.
Seifu, government.	Ikusa, battle.
Wasureru, to forget.	Makeru, to be defeated.

1. Kono tokoro wa mukasi Hideyosi ko ga hei wo atumeta tokoro de gozarimasu. 2. Yubin wa itu kono minato wo hassite itu Osaka ye tassimasu ka. 3. Kono yubin wa

konniti kono tokoro wo hassite miyoniti Ossaka ye tassimasu. 4. Sono Zainin wo bassita hito wa dare de gozarimasu ka. 5. Sono zainin wo bassita hito wa seifu de gozarimasu. 8. Mituhide wa Yamasaki ni hei wo atumete Hideyosi to tatakote tuini makemasita. 9. Masasige ko wa Minatogawa no ikusa ni utizini wo site noti no yo ni na wo nokosimasita. 10. Watakusi wa sono hanasi wo kite, oboyete, hito ni hanasimasho.

## CXX

1. Who punished that criminal? 2. The government punished that criminal. 3. Is this the place where Hideyosi collected his army? 4. No, this is the place where Yosimoto collected his army and fought against Nobunaga. 5. What is this place called? 6. This is the place called Okehazama of Narumi.

上に掲げた例文には豊臣秀吉、今川義元、織田信長、楠木正成等の武人の名前や戦場となった地名が多く挙げられている。日本の歴史の詳細を知らない日本語入門の英米人学習者が基本的な文の形を習得するために、このような馴染みのない武将の名前や戦場名で練習するのは親近感を持ってないであろうし、あまり効果的ではないのではないかと思われる。

馬場は当時、明治政府に対して批判的な姿勢を堅持しており、より民主的な言論活動を展開できるように、1885年11月に日本を離れ米国に渡航することを決していたが、同月に「爆発物取締規則」に違反した嫌疑で逮捕された。6か月後に証拠不十分で釈放されるが、釈放後10日で米国へ亡命するのである。米国における主たる活動は講演と執筆であったが、最初の講演のテーマは「日本古代の武器と甲冑」についてであった。

「抄」ならびに英文日記によると、1886年8月5日の日記には「弓と矢のことを書く」、8月11日には「弓のことを書き終わる」、8月16日には「槍と薙刀を終わる。刀の方は詳細なる説明をなさざるべからず」、8月19日には「武器考証を日本語で読み続く」とある。「(馬場は) 英文で日本武器の考証を書き始めたのであらう」と孤蝶は考察している<sup>16</sup>。日記によると、1887年にも米国各地で「日本の武器と甲冑」についての講演を行っており、その際、自身も武器を手にし甲冑を身に着けて見せた写真が現存している<sup>17</sup>。

上述の『日本文典初歩』2版の原稿は、1886年の年末にロンドンの「トゥリュブナー商会へ送られたとある。2版において上掲のように武将名や戦場名を多く掲げたのは元来馬場が土佐の武家出身であり、自伝においても武士としての出自が縷々述べられていること、自身も軍記を聞いて育ったこと、1886年8月に始まった日本の武器等の考証と1887年も続いて行われた講演との間に挟まれて練習問題の増補がなされたため、武将や戦場を話題に上げた例文が多く見られるのであろうこと等が考えられる。

CXIX 課の 5. Sono zainin wo bassita hito wa seifu de gozarimasu. という例文は馬場ならではの面目が躍如としている。民主主義思想を貫き、生涯、在野であり続けた馬場は



明治政府を常に批判し、政府から危険人物視されていたからである。

馬場は福沢諭吉の愛弟子で啓蒙思想家であったので、上に取り上げたような例文は初版から僅かではあるが載っている。例えば LXXXIII, 11 の「Zinmin wo kioiku suru ga yo gozarimasu.」等である。

2 点目に馬場の豊かな趣味生活がよく現れている語彙や例文を考察する。武将や古戦場名と同様に、初級学習者が日本事情を平行して学ぶには適切さを欠くと考えられる。

### CXIII

文法説明省略。(筆者)

単語訳省略。(筆者)

4. Nan to yuwu sibai no gedai de gozarimasu ka. 5. Tiwusingura to yuwu gedai de gozarimasu. 6. Sono sibai ni wa awarena tokoro ga takusan gozarimasu ka. 7. Tiwusingura ni wa takusan awarena tokoro ga gozarimasu. 8. Nan to yuwu yakusha ga Asakusa no sibai ni orimasu ka. 9. Danjuro to yuwu yakusha ga orimasu. 10. Danjuro wa watakusi ga mayeni mimasita yakusha de gozarimasu. 13. Sakuzitu anata wa karuwaza wo goran nasaru koto ga dekimasita ka. 14. Hei, dekimasita. 17. Sono atode (after that) nani wo goran nasareta ka. 18. Sono atode hebitukai to tedumasi wo mimasita. 19. Sono atode oyado ye (to your house) okaeri nasareta ka. 20. Iye, sore kara mata hanasika to koshakusi wo kiki ni ikimasita. 21. Dare ga kono katana wo kosirayemasita ka. 22. Sore wa Masamune to yuwu katana kadi ga kosirayemasita katana de gozarimasita. 23. Sakuzitu odori wo goran nasaru koto ga dekimasita ka. 24. Iye, odori wo miru koto wa dekimasenanda ga wuta wo kiki ni iku koto ga dekimasita.

馬場は観劇を大層好み、日記には海外においても頻繁に観劇をした記録があり、俳優の名も俳優の演技に対する感想も記している。

日本文化に対する趣味も広く、弟の馬場孤蝶は、

辰猪は極めて趣味の広い男であった。明治十一年の日記<sup>18</sup>を見ても、吾妻琴や生花の稽古をしたことが窺はれるし、明治十五年以後には、三味線や踊りの稽古もした。

と記している<sup>19</sup>。『馬場辰猪自伝』に、

馬場の家の家庭教育が、聊かではあらうが、当時の儒学的教育以外に、文学、美術の方面にまで及んでゐたことを吾々に示めすものである。辰猪は当時の政客として

は可なり多趣味であつた。英国留学の間に養はれたところもあるには相違なからうが、家庭に於ても、趣味教育の空気の存在してゐたことは争ひがたき事実である。

とあり<sup>20</sup>、2版における練習問題の例文に浅草の演芸場のことや咄家のこと、軍書を講じる講釈師のことが出てくるのは馬場自身の趣味の表れであるといえる。

3点目に貨幣の名称を挙げたい。1885年9月の自身の日記Cash AccountにはThe expense 90.53[yen]とあり、既に円を用いていることが記されているにもかかわらず、馬場は2版においても両を用いている。西田長壽ら(1988)によると、「民間では明治8年頃が両から円への転換期であり、馬場も(1875年の日記に)両表示を記している。」とある<sup>21</sup>。

1888年刊行の2版の練習問題に頻繁に両と出てくるのは、前掲の日記の原文によると、Falkmanから自署の『日本文典初歩』(初版と考えられる。)を借りた時日から2版の草稿を出版社に出した時期までの期間が9日間とあまりに短く、馬場はアメリカにおいて2版全体の推敲を十分にしなかったからではないかと考えられるのである。

例として次のような例文が挙げられる。XLVII課において、7. Anata no iye wa nan riyo simasita ka. 8. Watakusi no iye wa h'yaku riyo simasita. 13. Ikura anata wa kane wo motteimasu ka. 14. Watakusi wa kane wo zu riyo motteimasu. XLVIII課において、1. How much money have you? 2. I have three riyo. 等である。

在英日本大使館の浮田郷次が1904年に第3版を刊行したが、馬場の「原文を尊重しながら」<sup>22</sup>も若干の改訂を加え、「両」を「円」に改めている。

4点目として気になるのは肯定形の答えが多くは「へい」で始まっていることである。

CV.3. Anata wa sakuzitu Asakusa ye iku koto ga dekimasita ka. 4. Hei, dekimasita. 22. Anata wa kono musu no asi wo kenbikiyo de miru koto ga dekimasita ka. 23. Hei, miru koto ga dekimasita.

XCVII. 12. Kono okata wa anata no otomodati de gozarimasu ka. 13. Sayo, kono okata wa watakusi no tomodati de gozarimasu.

馬場はYesに当たる単語に対して、「へい」を紹介している。「へい」についてはyesと訳し、「さよう」についてはjust soと訳している。

馬場の生きた時代と同年代に編纂されたヘボン(1867、1872、1886)『和英語林集成』では、Hei へい Exclam. used in answering, same as *hai*, yes., Hai ハイ 唯 n. Exclam. used in answering; same as *he*, = yes; - to henji suru. Sayo サヤウ 左様 (comp. of *sa*, such, and *yo*, like; such like, that kind) adv. Yes, just so. indeed, so: - de gozarimasu. just so. (以下、例文略。)となっている。

一方、同『英和』では、初版 Yes, Sayo, hei 再版 Yes, adv. Sayo, hei. 3版 Yes, adv. Sayo, hei. とあり、初版、再版、3版とも「へい」、「さよう」とある。一方、W.H. メドハースト編(1830)『英和および和英語彙』<sup>23</sup>によると、ハイ Ha-i Yes とあり、へい He-i の箇所には壁のへい A wall しか載っておらず、また、「さよう」は掲載されていない。

江戸期には一般の人々が Yes を何と言っていたのかを、江戸落語の立川馬場<sup>24</sup>によって調べると「あい、はい、へい」ともに使用している。「はい」は「ハイ一把三文でござりますが、三把ならば八文に上げてませう」<sup>25</sup>とあり、「へい」は「へい御免なさりまし」<sup>26</sup>とあり、どちらも町人、商人が使っているが、「へい」は少しへりくだったニュアンスがあったようである。

例文に顕微鏡という単語を導入し、斬新で近代的であると思われる一方で、外国人初級学習者に「はい」を教えず、「へい」のみを教えていた。第3版では「へい」は「はい」と改訂され、「さよう」はそのまま使われている。

5点目に東京を変わらず江戸と記している点である。初版は1873年刊行のため、当時はまだ、江戸を好んで用いる人がいることはアーネストサトウの『外国人が見た明治維新』によってもわかる。サトウは、江戸を好んで用いた<sup>27</sup>。

しかし、1888年になっても「江戸」と教えるのでは外国人学習者に誤りを教えることになる。後述するように馬場自身は「初版における資料そのものを変更する必要はないと考えた。」と述べているが<sup>28</sup>、「江戸」についてはサトウのように「改革を好まないために」使い続けていたとは思えない。それよりも馬場の日記で上に見たように、10日間で2版を仕上げってしまったということが問題で、改訂する時間を持たなかったのかもしれない。3版では浮田は「江戸」をすべて「東京」と修正している。

6点目に綴りの誤記が多いことに気づく。

CXV 課において動詞の活用を示した箇所、Iku, to go, Ite. Ita (110頁)とある。しかるに馬場は『初版』において First conjugation ending in U-Iku, To go. と記し、Entreaty.....Itte-okure. Itte-kudasare. → go. とあり、te 形を正用している(12-14頁)ため、分析を誤ったとは考えられない。さらに2版の Iku の下の段には Hataraku, to work, とあり Hatarite. Hatarita. と誤記されているが、2版を使用した学習者によってであろうか、筆者が入手した Reese Library, Univ. Of California 所蔵版では Hataraitte. Hataraita. と手書きで修正がなされている。Iku の活用形である Ite. Ita は修正されていない。日本語の口語動詞の活用形については前述したように馬場自身も習ったわけではなく、1877年3月4日の日記にもあるようにずっと考え続けていたようである。初版においては正用されているにもかかわらず、2版で単なる誤記であるのか誤用しているものもある。筆者の入手した2版にはかつてこの本を使用した学習者によると思われる書き込みが多く、馬場の誤記も訂正されていることが多い。例えば Kasa, hat. とある箇所(初版も同様である。)に手書きの書き込みで Boshi (35頁)とあったり、masculine と Feminine の欄の goke と yamome を yamome と goke に訂正、widow を widower, widower を widow に訂正している(5頁)。また馬場の1887年の論説 The Japanese を「日本人」(37頁)と漢字で書いた書き込み等が見られる。なお、3版においては浮田によって誤記の当該箇所は訂正されている。

2版は日記にあるように急いで仕上げたのであろうか、全体的に誤記が多い。

本稿では文法事項に多くは言及しないが、一点、挙げるならば、馬場は初版で助詞に

ついて言及している。「本来は postpositon と言うべきであるが、prepositon と言うほうが学習者にわかりやすいから」としている<sup>29</sup>。しかし、2版では当該説明をなくし、初めから postposition としている。

### 3-2-2. 外国人学習者による練習問題に関するコメント

後述する『日本文典初歩』3版(1904)で日本語を学習したイギリス人カーメン・ブラッカーは1937年、12歳のとき母に誕生日プレゼントとして「大人向きの栗色の表紙の小さな本」である『日本文典初歩』を贈られて日本語の学習を始めた。ブラッカーが後年、日本研究者になったのは幼少時に『日本文典初歩』に触発されたゆえで、「多くの歳月が経った今、読み返してみても、感謝の念と愛情がこみあげてくる」と記している。「馬場の Grammar で実際に日本語を学んだ最後の世代の一人かもしれない」とも述べている。ブラッカーは3版で学習したのであるが、練習問題は修正箇所を除き、2版と同じであるため、ブラッカーの練習問題に関するコメントは2版の練習問題に対するコメントと捉えることができる。ブラッカーは概略、次のようにコメントをしている<sup>30</sup>。

ローマ字表記法は全くのヘボン以前のつづり方であり、そのための難しさがあった。例として歌は wuta' 上は wuye' 言うは yuwu' 鉛筆は Yempitsu である。

用語は明治初年の世代のことばで、1937年当時ですら古めかしいものがあった。例として笑った、戦ったは笑ウタ、戦ウタとなると、若干関西弁の響きも感じられる。練習問題113には蛇使い、手妻師(手品師)、軽業師などが登場する。練習問題119には「光秀は山崎に兵を集め秀吉と戦うて、遂に負けました。」(後略)のような例文があり、練習問題の中に実用的でないものがある。一方、動物や鳥に関する文例が多く、嬉しかった。

### 3-3. 馬場における『日本文典初歩』2版の位置づけ

馬場による2版の序文によると、

…本書が1873年に出版されたときには目的は2つあった。1つ目はわが国の一部の人々によって受け入れられた、日本語は非常に不完全でありそれゆえ撲滅されなければならないという考えに対抗するためである。しかしながらこの考えは不合理で非現実的であるとして断念されてきたように思う。2番目の目的は日本語が話されているままの口語としての概念を示すことであつた。本書にいくらか変更を加えたほうがいいという熟慮された提案もあつたが、自身としては資料そのものの変更は必要ないと考えた。そこで筆者が勧められると考えるいくつかの新しい練習問題を付加することにした。新しい練習問題は受け入れられると信じている。(拙訳)

とあり、初版のような、森有礼の英語国語論に反駁し、日本語での教育の可能性の検証という高邁な思想を謳いあげていない。在米中には馬場は悪化する重篤な病(結核)と

闘い、日本政府への妥協や転向を許さぬ情熱のためにもたらされた貧困と闘わなければならなかったゆえに、山田孝雄をもって「国語の大恩人」<sup>31</sup>と言わしめたほどの、初版の序文で謳われた高潔な思想は特に述べられていない。

初版における練習問題の配置の結果、日本語教科書という性格とその効果が表面に表われ、2版では思想的な表明よりも日本語文法の英米人への紹介、英米人による日本語の習得に与るという意味づけの方が大きくなったように見られる。英米における使用状況が好評であったことから、馬場自身も外国人学習者のための口語日本語の実用的教科書の編纂を意識するようになったのであろうかと思われる。

『日記』に書かれている Young 等の学習者のほか、新渡戸稲造の妻真理子も2版を使用して学習した。

#### 4. 3版への継承

3版は1904年、ロンドンにおいて日本大使館員であり、日本協会の書記でもある浮田郷次が出した改訂版のことである。3版では浮田自身の序文とともに、馬場の2版における序文、日本協会の会長である Arthur Diosy の序文を掲載している。

Arthur Diosy は、馬場の初版で日本語を習得した人である。馬場生存中1876年、ロンドンの劇場で自身の横に座っていた日本人に日本語で話しかけて、偶然、その人が馬場本人であったことにいたく感激したことを序文にも記している。

浮田と Diosy が馬場の仕事を尊重していることは随所でわかる。初版は馬場が Houghton 卿に献呈したものであるが、初版が同卿に献呈されたことが3版でも最初の頁に記されている。浮田は、改訂部分は必要最小限に止め、著者である馬場の主要な考え方はそのまま尊重したとある。「表記法は最近学者間で意見の一致を見、一定の方向に定まってきているが、初版はシ、チ、ツ、ヂ、ヅの新しい表記法 (shi,chi,tsu,ji,dzu or zu) が決定される前に出版された」と記し、「それゆえ新表記法を馬場の表記法 (si,ti,tu,di,du) と並べ、一覽できるように序文に記したが、本文では馬場の表記法の方が動詞の活用等を示すのにわかりやすいのでそのままにした」とある。また、音節として「ン」を追加した。本文では単純な誤記の修正、上述した両を円に修正する等の改訂をした<sup>32</sup>。

#### 5. おわりに

本稿では『日本文典初歩』2版の成立に関して、馬場『日記』の記述を手掛かりに考察を進めた。増補練習問題については実際に練習問題を考察しながら吟味をした。

2版は、馬場が持病の結核を抱え、明治政府と対立しアメリカにおける亡命生活を余儀なくされたもともと苦しい時に、病没する年(1888年)の6月に刊行されたものである。2版について馬場自身は「資料そのものを変更する要はないと思う」と述べているが、

推敲の時間もほとんど取られなかったと思われ、誤記や修正の余地を残していた。

一方で、ドリル式の極めてわかりやすい口頭での反復練習問題は、学習者の日本語習得を容易にし、英米での好評を大いに博したと考えられる。ロンドンにおける日本協会の会員である浮田郷次は、初版で日本語を習得し日本協会の副会長であった Arthur Diosy の協力を得て 3 版（改訂版）を 2 版の 16 年後に刊行した。

3 版の序文の左頁には、同時代にトゥリュブナー社から販売されていた日本語教科書や辞書の広告が掲載されている。Aston の Grammar of the Japanese Spoken Language の広告も載せられている。それらのうち、今後は未見の Japanese Conversation Course by H. Mutsu, A Textbook of Colloquial Japanese by R. Lange の複写を入手して馬場の『日本文典初歩』と比較検討したいと思う。

## 注記

- 1 馬場孤蝶 (1956)「馬場辰猪日記「抄」—日記を通して見たる馬場辰猪を中心に—」『明治文化全集』第 14 巻 日本評論社
- 2 馬場孤蝶 (1920)「日記を通して見たる馬場辰猪」『雄弁』大正 9 年 2 月号
- 3 西田長壽・萩原延壽ほか編 (1988)『馬場辰猪全集』第 3 巻 岩波書店所収 馬場辰猪「日記」1875、1877、1880、1886—1888 年分が掲載されている。
- 4 馬場孤蝶 前掲「馬場辰猪日記「抄」」358 頁
- 5 岡倉由三郎 (1935)「恩師チャムプレン先生を偲ぶ」『英語青年』第 73 巻 2 号 英語青年社 39—42 頁
- 6 同上
- 7 金沢朱美 (2008)「馬場辰猪 “An Elementary Grammar of the Japanese Language” —動詞分類の特徴ならびに出現背景についての考察を中心に—」『日中学術研究誌』2—1
- 8 馬場孤蝶 前掲「馬場辰猪日記「抄」」357 頁
- 9 西田長壽・萩原延壽ほか編 (1988) 前掲書「日記索引」
- 10 馬場孤蝶 前掲「馬場辰猪日記「抄」」381 頁
- 11 Bought German Grammar by Ahn. とある。
- 12 Howatt (1984) “A History of English Language Teaching” Second Edition, A.P.R. Howatt with H.G. Widdowson, Oxford
- 13 長沼直兄 (1955)「日本語教授法講義」梶井沢にて集中講義、『長沼直兄と日本教育』(1981) 所収 開拓社
- 14 西田長壽・萩原延壽ほか編 (1988) 前掲書所収 1880 年の日記 246 頁  
馬場孤蝶 前掲「馬場辰猪日記「抄」」363—364 頁
- 15 金沢朱美 (2009)「馬場辰猪『日本文典初歩』における練習問題の考察」『目白大学人文学研究』5 号
- 16 馬場孤蝶 (1920) 前掲『雄弁』
- 17 萩原延壽 (2007)『馬場辰猪』朝日新聞社 297 頁
- 18 馬場孤蝶 (1920)「日記を通して見たる馬場辰猪」西田長壽・萩原延壽ほか編 (1988) 前掲書 113 頁から 114 頁にかけて「明治十一年の日記を見ても」と引用の部分があるが、明治十一年 (1878 年) の日記は散逸して現在は見るできない。
- 19 同上 114 頁
- 20 西田長壽・萩原延壽ほか編 (1988) 前掲書所収 馬場辰猪「馬場辰猪自伝」42 頁

- 21 西田長壽・萩原延壽ほか編 (1988) 前掲書所収 1875 年の日記 179 頁
- 22 浮田郷次 (1904) 序文、馬場辰猪『日本文典初歩』第 3 版所収 Trubner & Co.Ltd., London
- 23 W.H. メドハースト編 (1830)『英和および和英語彙—日本人の著作に基づき編纂された—』パタヴィア
- 24 立川焉馬 寛保 3 年に生まれ、文政 5 年没す。
- 25 近世文芸研究叢書刊行会編 (1998)『三遊亭圓朝子の傳。江戸の落語；講談落語今昔譚 (近世文芸研究叢書第 2 期芸能篇 39：諸芸)』75 頁 クレス出版所収 立川焉馬「三番叟」
- 26 同上 110 頁
- 27 アーネスト・サトウ 坂田精一訳 (1960)『一外交官の見た明治維新』下 岩波書店 238 頁
- 28 馬場辰猪 (1888)『日本文典初歩』2 版序文
- 29 馬場辰猪 (1873)『日本文典初歩』London: Trubner and Co., 57 & 59 Ludgate Hill. 36 頁本文に Of Prepositions, A Preposition is a word…とあり、脚注に、Since this part of speech is not placed before nouns or pronouns in the Japanese language, we ought rather to call it a 'postposition,' but the use of the word is exactly the same as that of the English Preposition, so we think that the use and meaning of it will be better understood by the usual term 'preposition.' とある。2 版 (1888) London: Trubner and Co., 57 & 59 Ludgate Hill., New York: D. Appleton and Co., 1,3 & 5, Bond Street では 20 頁本文に、Of Postpositions, A Postposition is a word…とあり、脚注は付されていない。
- 30 カーメン・ブラッカー (1988)『馬場辰猪『日本語文典』を思う』西田長壽・萩原延壽ほか編 前掲書 月報 3
- 31 山田孝雄 (1943)『口語法の研究及び馬場辰猪』『国語学史』寶文館
- 32 浮田郷次、Arthur Diosy 編、馬場辰猪 (1904)『日本文典初歩』第 3 版 London, Kegan Paul, Trench, Trubner & Co.Ltd. Dryden House, 43, Gerrard Street, W.

(かなざわ あけみ 目白大学)